

明惠上人の高山寺庵室について

棚板間隔は1.18尺(35.5cm)である。ただし、最上段では今の長押の位置により狭くなり不適当だと見れば、もとは長押の位置が高かつたことを示す痕跡が柱上部に残つてゐる。また、この柱の南面は壁であつたことを示す痕跡がある。

寛永の図と合う点は、背面で、柱を中にし左右に開く引戸の部分で、そのあたりは建立当初のままらしい。又古い趣を残してゐる西面落板敷のあたりは、そこに春日住吉両神影が奉祀された時に拝所として改造附加されたものであると考えれば、文暦2年(1235)の仕事である。それ以外の寛永の指図に合わない点は、後世の改造であつて明治22年移建の時のものと考えていいであろう。

以上のように、今の石水院と寛永差図とを比較すると変つてゐる部分も多いが、けじめに合致する点があり、今は、畳を敷いて座敷となつてゐる所は顯經藏であつた。また、春日住吉両神影の奉祀されてゐた部分も改造されているが、その拝所はよく保存されている(ただし向拝は後世のもので昭和修理で整備された)から、この建物は寛永時には石水院と呼び、別に東經藏とも呼ばれていたもので、そのまま、明惠上人が高山寺を建立した頃(建永元年、1206か)の東經藏となり、石水院としてもととから庵室ではないといえる。

(杉山信三)

図版解説

白朱子地椿樹万字つなぎ文様縫箔能衣裳

桃山時代

松山市 東雲神社蔵

衣裳の全面に万字つなぎ文様を金襷箔にし、その上に満開の花をもつ椿樹を刺繡した、いわゆる縫箔である。

衣裳の前面は、上前のおくみの裾から花をもつ椿樹二本を出し、一本は中央部まで他の一本は力強く左の袖にむかい、下前のおくみの裾からは右の袖にのびる満開の椿一本を置いて文様の均勢をとつてゐる。背面の文様構図は、後身ごろの右裾から花咲ける二本の椿を出し、一本は裾部に展開し、一本は右袖付の辺りからぐつと左袖にむかい、枝を中心、左、右と出して椿花を全面に散らす。

白地に金の強い配色の上に、幹と葉を崩黄色、花を紅、黄茶、紫色糸で刺繡して見事な統一ある配色調和を表出した色彩感覚は、大胆な文様構成と相俟つて桃山期の特色を明示するものである。さらに、平縫いを主とし、一見、ち拙と思われるところのある繡法を観察すればその感は一層深い。保存のいい桃山期のすぐれた作品といえよう。

(守田公夫)